

じんけん瓦版

第 68 号

発行日：2018 年 3 月 18 日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

世界エイズ・デー記念礼拝メッセー

私が私として両親と向き合うまで

日本 HIV 陽性者ネットワーク JANP プラス
スピーカー：けいた

私は 2011 年の冬に HIV であることを知りました。風邪のような症状が随分と長く続いた挙句にひどい肺炎になった状態でした。治療のおかげで、今となっては毎朝 1 錠の薬を飲むことと、数か月に一度の定期健診と薬の処方を受けるために通院することだけで表面上は普通の生活をしています。

今日は私が HIV と共に生きていくなかであった良いことと悪いことの話をしていただこうと思います。AIDS が昔のような死の病ではなくなり、今の私がしているような「普通な生活」を送れるようになって、1 人の HIV 感染者がどのように生活に影響をしているかを知って頂きたいと思います。

まず HIV だということを知る前の状況からお話しいたします。私はゲイです。それとは関係ないですが、小さな頃からお喋りで家族、特に母とは本当に毎日沢山のことを話す子供でした。中学生の頃に自分のセクシャリティに気がつき始め、高校生、大学とそのことは自分だけの秘密として成長しました。まわりにそんな人は居なかったし、どう受け止めていいのか分からず、大学卒業まで実家で生活をしていたこともあり当時者同士の交流をもつことはありませんでした。

就職とともに東京に出た頃から初めてゲイバーに出歩くようになりました。そこで友達もでき週末にはよくいっしょに遊んだりするようになりました。そのような付き合いは自分を隠す事なく自由な気持ちになれるとても楽しいものでした。その頃も週に何度かは実家に電話をして両親と話をしていました。しかしそのような経験は母とは話せませんでした。どう話していいのか分からなかったし、話さなくてもいいかなと思っていたのが正直なところでした。

しかし充実した時間を送っているのにその事を話せないことは私と家族との心理的な距離を大きくしていきましました。このような状態をなんとか脱したい、今後の人生をどう生きていくかを考えたいと思い、海外の大学院への進学を決めました。ジェンダーという社会学で性について考える専攻を選んでいましたが、両親にはあまり説明をせずに出発しました。父は僕が出発するときに「この子はいつか帰って来なくなるかもしれない」と思っていた事を最近話してくれました。

最初に話した HIV による肺炎になったのは現地についてすぐのことでした。検査を受けた時はまだ HIV についてはなにも知らず、死ぬ病気だと思っていましたし、治療は出来るといってもどんな生活になるのか全くイメージが出来ずとても不安でした。そもそも自分とのセクシャリティとどう付き合っていくのかを考えることのための留学だったのに、こんなことになってますます家族には話せないことが出来てしまっとうしよう、という事ばかり考えていました。

始めのうちはどう家族に心配をかけず、バレないように、秘密にしながらこれを乗り越えるか、という事でした。実際に現地の陽性者支援をしている NPO のボランティアや看護師の人からは話す必要はないこと、特に今は分かってすぐで驚いているだろうから落ち着いてからでも良いのではないかと、というアドバイスを貰いました。確かに一度伝えるとなかったことには出来ませんし、家族との関係が悪化すると治療のほかにも更に苦勞することが増えるので、良いアドバイスだったとおもいます。

ただ私の場合は両親に話す決断をしました。変化していく自分を知ってほしいこと、変化を乗り越える上での応援がほしかった事が大きな理由です。そのきっかけとなったのはゲイであることを隠してきた私をそれまでの

数年間見ていた知人の言葉でした。隠すことにもエネルギーを使うしそれはもう病気を乗り越えることに使うべきじゃないか、という内容でした。

両親には私がゲイであることから話し、それだけでも十分大きな告白ですが、続けて体調を崩している原因がHIVであることを話しました。父の手が凄く大きくて震えていた事を今でも覚えています、まずは私の体調を心配し回復に向けて応援をしてくれました。話した後に肩が随分と軽くなり、とても安心した気持ちになった事を覚えています。

両親へのカミングアウトはしたものの、やはりお互いになかなか理解し合えない事、一緒に生活をしていた時

期にHIVを過度に恐れて嫌な思いをしたことは沢山ありました。喧嘩もしました。話したからといってすべてそれでも解決をしたという訳ではありません。それでも人生の中での大きな出来事に向かえるにあたり、自分にとって大切な人にその事を話せたことはとても良かったと思っています。

毎日の生活の中でHIVと共に生きることは気をつけなければならないこと、不便なこと、誤解をされたり怖がられること、将来への不安など色々と苦勞があります。ならなかった方が良かったと思います。それでもこういう状況になり変わったことや、得られたものもたくさんあります。

NCC-2017 年度人権文化セミナー連続講座・第3回 ～墨田区の被差別部落フィールドワーク～

かくされた悪を注意深くこぼむこと

阿佐ヶ谷聖ペテロ教会 吉野 かおり

教区時報を見て気になっていたNCC（日本キリスト教協議会）部落差別問題委員会主催のフィールドワーク（全4回中3回目）に、ようやく参加できました。参加者は10名程度でした。

荒川沿いの土手では、関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘・追悼する会「ほうせんか」の西崎雅夫さんにお話を伺いました。小学校の一教員が地域の歴史教材として荒川放水路の開削についてお年寄りから聞いた話が、活動の端緒だそうです。1923年の関東大震災からおよそ半世紀後、1975年頃のことでした。その間に土地を離れた人もいたでしょうし、震災と虐殺後に生まれ育った世代も既に働き盛りになる時間の中で、虐殺しかも加害の出来事を積極的に語る人はいなかったでしょう。絹田幸恵さんが教材として荒川放水路に注目しなければ、追悼の碑どころか事実さえないことになるどころでした。虐殺があった河川敷に計画された追悼の碑建立や植樹は区や国交省に認められず、荒川土手近くに得たという私有地に碑は建っていました。

それまでと全く異なって見え始めた荒川土手を歩き、木下川及び皮革産業の歴史的背景、職業差別や強制移転についての説明を受けながら「産業・教育資料室 きねがわ」に向かいました。資料

室では皮を革にする工程を、実物や映像を交え岩田明夫さんからお聞きしました。豚革の鞣（なめ）し工場も見学しました。木下川の子も達が受けた差別、彼らが綴った作文、そこから生まれた人権・同和教育運動について伺ったお話を自分なりに反芻しながら歩く工場地帯は、知らずに歩けば“職人さんの町”とだけ映ったと思います。

表題の言葉は、谷川俊太郎さんの詩「生きる」の一部です。「生きているということ/いま生きているということ/それは」と展開し「すべての美しいものに会おうということ/そして」に続くのが、この表題です。詩は最後に「人は愛するということ/あなたの手のぬくみ/いのちということ」と結ばれます。

差別や虐殺の事実を知らなくても生きることができます。しかし「パンのみにて生きるにあらず」。かくされた悪を注意深くこぼむことはできず、結果的にそれらを容認・黙認することになります。名も知られぬまま奪われた命と「差別を受けた時にどう返すか」の学びを必要とする子ども達。彼らを知ると過去・現在の世界は違って見え始めます。虐げられた命と幼い心のために祈り、誰かに伝えることが、かくされた悪を注意深くこぼむ生き方につながると信じて。

改めて目を向ける

阿佐ヶ谷聖ペテロ教会 吉野 俊樹

未だ続く被差別部落の問題を再認識した前回に続き、第4回のフィールドワークに参加しました。今回は約20名の参加者が東京近郊の栃木県に足を運び、足尾鉍毒事件という公害と被差別部落について学びを深めました。

この2つの問題は本来、別のテーマですが、公害の被害を集中的に受けたのが被差別部落の地域であったことに、やはり何らかの因果関係を感じざるをえませんでした。弱い所を襲った公害は日本の殖産興業政策の負の部分であり、農作物に甚大な被害をもたらし、そこで農業を営む人々の暮らしを脅かしました。谷中村（掲載写真参照）に至っては当時の明治政府の判断



谷中村跡

によって廃村に追い込まれました。故郷を奪われた方々の気持ちを察し、大変心を痛めました。他方で、足尾鉍毒事件の解決に一生を捧げた田中正造氏について学び直し、その正義感、責任感、そして行動力に勇気づけられました。名士としての地位や名誉を投げ捨て、地元

農民と共に時の権力に立ち向かう姿に胸を打たれました。彼の最後の財産は菅笠と信玄袋と僅かなもので、その袋の中に新約聖書が納められていたことは、キリストの教えに倣った彼の生き方を表していると思いました。

足尾鉍毒事件は解決に尽力した方々の熱意もあり1974年に加害企業（旧古河鉍業）との和解調停が成立したのですが、弁護士などの専門家に頼らず、自分達で根気強く運動して企業責任を認めさせたことは驚きでした。運動のリーダー役を担った板橋明治氏の気概は田中正造氏と通ずるところがあり、また板橋氏の御長男はその遺志を受け継ぎ、現在も太田市の学習センター内にある足尾鉍毒展示資料室を拠点に啓発活動を続けられています。この事件は和解調停をもってすべて解決したわけではなく、今もって苦しみの中にある方々がおられることを胸に刻みました。

フィールドワークでは主要な訪問先がいくつかあったため、分刻みとなることもありましたが、バスで効率的に回っていただきました。昼食会場を兼ねて立ち寄らせて頂いた日本キリスト教団の佐野教会では信徒の方々からの歓迎を受け、心温まる触れ合いでした。

事実に向き合い、正しく理解することの必要性を痛感した一日でした。根絶していない社会問題に改めて関心を抱き、考え直す機会にもなりました。出合った皆様との交わりに感謝しつつ、共に暮らす人々が互いに尊重し合う社会の実現のため、小さくとも次の歩みにつなげていきたいと思います。

電話相談員ボランティア募集

「東京多摩いのちの電話」は“命をつなぐ・気持ちをつなぐ・明日へつなぐ”の志のもと、日本における「いのちの電話」のひとつとして、1985年の開局以来電話相談を受け、活動に取り組んでいます。

「募集要項請求・問い合わせ先」

NPO 法人東京多摩いのちの電話事務局

〒185-0012 国分寺本町郵便局留

TEL 042-328-4441 FAX 042-328-4440

守大助さんー仙台北陵クリニック・筋弛緩剤えん罪事件

不当決定!再審までも認めず 今後のたたかいの舞台は最高裁へ

2/28、仙台高裁は、突然、再審棄却の不当決定を下しました。

記者会見で、弁護団が「今回の決定は、仙台地裁の決定からも後退した。完全に開き直り、『科学に対する挑戦』と言える。医学的エビデンスも無視し、虚偽自白については全く触れていない」と説明しました。

手紙で、裁判官に抗議の声をお届けください。

〒980-8638宮城県仙台市青葉区片平1-6-1

仙台高等裁判所第一刑事部

嶋原文雄裁判長

行方美和裁判官

根崎修一裁判官

* 守大助さんを手紙で支えてください

〒264-0023

千葉市若葉区貝塚町 192

あの日、涙
そして悔しさ
誰が見ても
本件の裁判はデタラメ
そんなデタラメが
決してゆるされていいはずがない
無実なのだから
僕は戦いつづける
弱気になってしまふ僕を
多くの人が支えてくれている
僕は負けない
無実の僕は負けない

守大助詩文集「僕は無実です」より

【カトリック・聖公会合同特別企画】

愛する人の喪失、そして招命

～遺族として、韓国人として、キリスト者として、宗教と死刑を考える～

とき： 2018年4月14日（土）14時～16時

ところ： 岐部ホール3階305号室（四ツ谷駅すぐ）

カトリック麴町聖イグナチオ教会内

〔東京都千代田区麴町6-5-1-3階〕

講師： 司祭 ステパノ 卓 志雄（タク・ジウン）

韓国ソウル出身。日本聖公会東京教区司祭。1994年の父の死をきっかけに召命を受け、司祭となる。現在は、日本聖公会東京教区の宣教主事、および三つの教会の牧師を務めている

同時開催：映画「許し ～その遥かなる道～」 無料上映会 同会場にて12:00より

主催・お問い合わせ 日本カトリック正義と平和協議会「死刑廃止を求める部会」

Tel 03-5215-1844 (jccjp@cbcj.catholic.jp (やながわ))

共催 一羊会 (東京教区正義と平和協議会加盟団体)